



施設園芸の魅力

有馬 智美 ネボン(株) 営業部

私は愛媛大学農学部で施設園芸の環境制御について学び、平成元(1989)年にネボン(株)へ入社後、主に温室内の空間制御(暖房・冷房・湿度・炭酸ガス濃度・空気循環等)に係わる設備設計に携わってきました。作物を取り巻く多くの環境因子の関係性を考慮しつつ、さまざまな手法を用いて温室内環境を制御し、ベストプラクティスを導き出す。その過程はとても科学的です。農業は「再現性」の低い産業だと言われますが、そういう意味では施設園芸はかなり異色かも知れません。

家業が農業ではないのになぜ農学部に進学したのか、思い起こしてみました。当時、人口爆発による食糧危機について大きく報道されていました。どんなに科学が進歩しても、どんなに人間が進化しても、命を支えるのは「食べること」。とても明快な答えに、「これからは農業だ!」と意気揚々と農学部へ進学。ところが、入学してみたら専攻学科で女子学生は自分だけ。先輩も後輩も(先生も)女性は皆無。気持ちが折れかかったときに、授業で施設園芸に出会いました。自然環境に翻弄されず意図的に栽培環境を制御することで、生産性と品質が安定し、単位面積当たりの収量が向上。まさに農業の「再現性」を補う秘策だと感じました。

しかし社会人となり、生産者様に環境制御を提案する側に立ったときに、イニシャルコスト・ランニングコストが重くのしかかっている現実と直面しました。中でも、ランニングコストの多くを占める暖房用燃料代の削減は急務でした。数年前まで1リットル40円前後だったA重油があっという間に倍以上に高騰。当社がどんなお役に立てるの

か、まずは大きな投資なしに設備を見直して省エネを図る勉強会を各地で開催。さらに、直接燃油量を削減できるヒートポンプや木質ペレット焚き温風機を開発して参りました。また、ヒートポンプ等の新規投資を最小限に留め、お手持ちの暖房機と組み合わせて暖房することによりランニングコストを削減する「ハイブリッド運転」を推奨し、コストカットのお手伝いをさせていただいております。最近では燃油代が下がり、電気代が上昇傾向にあります。夜間に外気温が下がってくると、ヒートポンプの能力が低下し電気代の方が高くなる場合があります。そんな際も、ハイブリッド運転ならコストカットが可能です。また栽培技術へのお手伝いとして温室内栽培環境のデータ化や、設備トラブルが経営に与えるダメージを回避するためのメンテナンスの仕組みをクラウド上で展開中です。

ライフスタイルの変化に伴い、農産物消費に2極化が見え始めています。「大量で安い」ことが一番の価値だったはずが、「少量・こだわり・高くてもちょっといいもの」に価値を感じる層が増加中です。一方、生産者側においても若い担い手や法人の増加・農業女子の活躍など、多様化が進んでいます。農産物の消費ニーズの変化(=ビジネスモデルの変化)を、作り手側がどれだけ敏感に感じ取り柔軟に対応できるか、付加価値付けが得意な施設園芸の本領発揮です。

施設園芸分野での女性の参画はまだ少ないですが、今後多くの女性が携わり多様化が進むことが、業界全体のしなやかな成長に寄与すると感じています。その一助となれるようこれからも努力して参ります。